

[085_03-04] 法政研究表紙奥付

<https://hdl.handle.net/2324/2230980>

出版情報：法政研究. 85 (3/4), 2019-03-08. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：



九州大学教授 大河原伸夫 先生

大河原伸夫先生は一九五三年に東京都に生まれ、七八年に東京大学法学部をご卒業後、東京大学大学院法学政治学研究科、さらにはコーネル大学で修士号を取得された。八五年に東京大学大学院法学政治学研究科博士課程を単位取得退学されると同時に、九州大学教養部専任講師に着任、翌年には助教に昇任された。教養部時代にはカリフォルニア大学バークレー校やコーネル大学でも客員教授として教鞭を執られた。九四年には九州大学教養部の改組に伴い九州大学法学部助教に転じ、九六年には教授に昇任された。その後は法学部、法学研究科・法学府で比較政治学をご担当されるときともに、比較社会文化学府で政治社会論、改組された地球社会統合科学府では国際政治コミュニケーション論をご担当された。さらには、法学府CSPAコースにおいてPolitical Science Literacyを「担当された」。

大河原先生のご研究は、大きく三つの時期に区分できるであろう。第一期は、従来の政策研究を批判し、政府行動の適切な記述は何か、という問題に取り組まれた時期である。その成果は『政策・決定・行動』としてまとめられている。第二期は、「経済大国」日本の安全保障政策の分析に取り組まれた時期である。ピーター・カツツェンシュタイン教授——二〇〇八年〜〇九年にアメリカ政治学会会長を務められた——との国際共著論文を多数公刊されている。そして第三期は、政治的言語、特に抽象概念の考察に取り組まれた時期である。レイコフとジョンソンの概念メタファー論の検討に長く取り組まれてこられたが、最近ではライル、ペティット、サールの理論の検討へと射程を拡げておられる。難解な諸理論を組上に載せた切れ味鋭い論考群は、政治学界にたいする大きな貢献であるといえよう。

大河原先生はまた、ご自身の研究成果を十分に活かして、学部生にたいしては「学問とはここまで考え抜くことなのか」という驚きを与えるとともに、大学院生にたいしては、一言一句もゆるがせにしない論文指導をおこなってこられた。概念上の混乱や論理的な飛躍などを鋭く見抜く大河原先生の眼力なしには、優秀な修士論文や博士論文は生まれなかつたであろう。

大学の管理運営面では、法学府と比較社会文化学府・地球社会統合科学府という二つの学府の各種委員会をご担当され、学府間の調整にご尽力された。九州大学の学府・研究院制度を支えてこられた功績は極めて大きい。

大河原先生が定年退職を迎えられるにあたり、長年のご功勞に感謝し本号を献じたい。そして、大河原先生のご健勝とご活躍を心より祈念申し上げます。